

令和元年度自己点検・評価報告会 質疑応答（要旨・抜粋）

（R1. 12. 24 開催）

1：滋賀大学の現状分析と今後の課題

Q.（学生の質問）

・報告書2ページの「イ、滋賀大学の状況」のなかで、「滋賀大学3.0が始まった」とあるが、2.0では何を行っていたのでしょうか。また、その課題にはどのようなものがあり、3.0が始まったのでしょうか。

A.（位田学長）

「滋賀大学1.0」とは、創立から2004年に国立大学すべてがそれぞれ法人化された時までを指します。「滋賀大学2.0」は、2004年に国立大学が法人化され、国立大学法人滋賀大学となってから12年間の時代です。各国立大学は、法人化すると自由が高まり個性を発揮できると期待されましたが、大学の基本的な経費である運営費交付金は文部科学省が配分しており、また複数の評価制度が導入され、大学の自由度には限界がありました。さらに運営費交付金も漸減され、教育研究にも支障をきたすようになってきました。こうしたことから、滋賀大学もそれ以前のように落ち着いて教育研究のできる状況ではなく、滋賀大学2.0はいわば「嵐の時代」でした。その後2016年度から第3中期が始まり、わが国初のデータサイエンス学部が設置されて、滋賀大学は元気を取り戻し始めました。そこで、第3期が始まる2016年からの時代を「滋賀大学3.0」と呼んでいます。

私がちょうど学長に就任したのが2016年で、翌年に「滋賀大学イノベーション構想—きらきら輝く滋賀大学」を発表しました。「滋賀大学3.0」は具体的にはこのイノベーション構想に従って進展しています。

Q.（学生の質問）

・報告書11ページの「課外学習支援」について、「学生自主企画プロジェクトを11件採用した」とありますが内訳としてはどのようなものがあったのでしょうか。

A.（喜名理事）

令和元年度学生自主企画プロジェクトの活動は、従来の活動に加え、本年度より「SDGsに係る取り組み」を支援対象として募集を行いました。

採択されたプロジェクトの支援対象の内訳は、「教育交流活動」4件、「地域貢献活動」5件、「ボランティア活動」2件、「キャンパス改善活動」3件、「SDGsに係る取り組み」5件です。

Q.（学生の意見）

・大津キャンパスでは、大学マスコットキャラクター「カモンちゃん」の認知度が低く、どのような活動をしているかについて知らない人も多いと思います。「カモンちゃん」の活動や滋賀大グッズの充実等とは具体的にどのようなことを指しているのでしょうか。また、活動や企画などの様子をもっと学生にも知ってもらう必要があるのではないのでしょうか。

A.（須江理事）

カモンちゃんは滋賀大学のキャラクターですが、本学での広報展開に役立てるために、本年商標登録を行い、両キャンパス学生からなる「学生広報サポートチーム」の協力を得て、大学HP、広報誌などで積極的に取り上げ、広報活動に使っています。

着ぐるみとしてのカモンちゃんの活動は、現在、彦根キャンパスの学生20名で構成される「カモンちゃん倶楽部」により支えられており、入学式での新入学生の歓迎、記念式典等でのお客様の接遇や記者会見への参加、学園祭イベントなどがあります。また、例えば、10万人近く来訪する彦根の「ご当地キャラ博」への参加など学外での活動もあります。

なお、滋賀大学のトップページには、先月カモンちゃんを紹介するページのバナーを設けました。またHPではカモンちゃんを活用した動画での大学紹介も行っていく予定です。

す。このため、今秋行ったカモンちゃん声優の公募には両キャンパスから学生の応募があり、先日決定したところです。登場を楽しみにしてください。

更に、2020年1月には「カモンちゃんのLINEスタンプ」を公開する予定です。こうした取組みも「学生広報サポートチーム」の活躍と協力によるものです。

一方、滋賀大グッズは、オープンキャンパスなど外部からの来訪者向けの記念品や滋賀大学への寄附金への返礼品として使用することを念頭に、様々な種類のもを制作、頒布しています。グッズの開発は、上記両キャンパスの学生からなる「学生広報サポートチーム」のアイデア、デザインを基に、同チームと広報室とが連携して行っているものが最近中心になっています。現在、マグカップ、ポストカード、ノート、クリアファイル、ピンバッジ、ボールペン、カモンちゃんぬいぐるみなどのほか、本学学生・教員と企業との連携で開発した日本酒などもあります。これらのグッズの一部は、協力の得られる彦根地区生協、入学式などで販売も行っています。

大学キャラクターであるカモンちゃんについては、大学のブランド力向上にも役立つので、今後とも「学生広報サポートチーム」や「カモンちゃん倶楽部」と連携をとり、より広い方々に知って頂くよう努めていきたいと考えています。皆さん方も機会があれば宣伝にご協力いただければ幸いです。

Q. (学生の質問)

・文教ニュース・文教速報での実績件数が昨年度の11月時点と比較すると4倍近くに増加しているとありますが、理由があれば教えていただきたい。

A. (須江理事)

文教ニュース・文教速報は、大学関係者を中心とする教育系の業界誌です。昨年後半より、広報戦略の一環として、滋賀大学の活動を、教育関係者をはじめとしてより多くの人々に知ってもらうため、これらに対する情報提供についてもより丁寧に行い、機会を増やしています。

2：学部・附属施設の現状分析と今後の課題

Q. (学生の質問)

・報告書38ページのGPA制度に関する記載について、なぜ教育学部では2.0を基準として面談や指導をおこなうようになったのでしょうか。基準を設定した根拠を教えてください。

A. (杉江教育学部長)

GPAは、教育採用試験の大学推薦、あるいは短期・長期の留学の際の日本学生支援機構の奨学金など、様々なところで資格基準になる数値です。その場合、2.0あるいは2.3あたりがクリアすべき基準となることが多く、言い換えれば、GPA2.0前後は、学生の大学での勉強が順調に行なわれているかどうかの目安となる数値です。そこで、GPA2.0未満の学生には早めに履修指導を行うことにより、成績の向上を目指してもらいたいとの趣旨から、今年度より履修指導週間を設け、面談や学修指導を行っています。

Q. (学生の要望)

・地域の公立学校での教育実習について、栗東市や守山市、大津市、草津市などと連携を実施しているとのことだが、滋賀県内のその他の地域でも実施していただきたい。

A. (杉江教育学部長)

公立学校の教育実習(地域実習)は現在、栗東市、守山市、大津市で実施しており、次年度から草津市での実習も開始する予定です。地域の公立学校での教育実習は、学生の皆さんの多くが卒業後に公立学校教員として勤務することを考えると、大変有意義な実習です。しかし、教育学部の実習指導担当教員は、大学での講義等の合間を縫って学生の実習先を訪問し実習を参観したり指導を行ったりしなければなりません。そのためにはある程度移動しやすい距離であることや、交通手段が確保されている地域であることが条件となります。県内の様々な地域で実施できるとよいのですが、現実には、大学

からの距離が近く、JR 線で比較的移動しやすい栗東、守山、大津、そして草津が選ばれています。

Q. (学生の質問)

・報告書 50、51 ページの「専門性の質保証のあり方を探る教育プロジェクト」について、統計検定を対象に加えることがγ型人材育成にどうつながるのでしょうか。経済学部生ではγ型人材の育成をどのように考えておられるのでしょうか。

A. (田中経済学部長)

これからの社会においては、自分の専門科目を軸として、関連分野まで学ぶことによって複合的な目を持つことが重要となります。経済・経営・社会システム等の専門分野を主専攻として学ぶ経済学部生が、統計検定や将来的にはAI関連の検定や資格取得を学修成果の到達度を示すものとして組み込み、授業に補習や自己学習を組み合わせた集中的な学習のプログラムで学ぶことで、数理・データサイエンスの知識・能力を主専攻に活かす力を養うことができると考えています。どの分野においても今後ますます、データに基づき、データから新たな着想や問題解決を引き出す力が必要とされるものと思われれます。

また、金融や会計等の分野で行っているプログラムに、データサイエンス学部（や教育学部）の学生を受け入れることで、また異なったタイプの「型人材の育成にも貢献しようと考えています。

3：各センター等の現状分析と今後の課題

Q. (学生の意見)

・保健管理センターで行うイベントや検査などについて、もっと学生にアピールしていただきたい。掲示だけではなかなか見ない人もいるので、サクセスを通じたメッセージ等を送るとよいのではないのでしょうか。

A. (山本保健管理センター所長)

保健管理センターの行事等の学生への告知は、大切なことと認識して改善に努めているところです。以下のように様々な手段を利用して告知しています。

学内での掲示、センターホームページ：基本的に全ての活動を掲載しています。

大学ホームページ「大学からのお知らせ」：

滋賀大学健康セミナー等、対象に学外の方を含む場合に掲載しています。

サクセスの「お知らせ」：

定期健康診断やセンター主催のレクリエーション企画の案内等、学生を対象にしたすべての行事案内を複数回掲載しています。

サクセスの「メッセージ」：

留学生健診など少人数で対象者をセンターで把握している場合、また健康診断の事後措置の呼び出しや貧血検査や女性相談など特に受けて欲しい個人に対しては個別に「メッセージ」を送付しています。

その他：

各ゼミの協力を得て4回生進級前の3回生に対して次年度の定期健康診断の案内を配布しています。

マラソン・駅伝前の健診：主催者（体育会）にまかせています。

部活などで必要な健診：部にまかせている。

センターから学生さんへの要望：

なかなか呼び出しに応じなかった学生さんに理由を尋ねると、「知らなかった」、「サクセスを見てない」等と答えるのを耳にします。是非学生の皆さんには、ホームページやサクセスをチェックする習慣を身につけるようにお願いします。

4：全体を通じての質問・意見

Q. (同窓会の質問・要望)

内部質保証に関して、評価項目はどのようなプロセスで設定されているのでしょうか。例えば、大学としてグローバル化を掲げているのにも拘わらず、国際交流に係る評価項目が少ないのではないかと思います(交換留学生の推移、留学生のその後の成長等)。評価の受け皿としては良いと思いますが、今後より緻密に検証をおこないながら、施策に生かしていくことが望まれます。

また、人事給与マネジメント改革について、どのような点に基づいて評価されているのでしょうか。教員評価は大変重要なことであると考えており、重点を置いた施策に取り組んでいただきたい。

A. (金子副学長)

点検項目については、大学改革支援・学位授与機構の分析項目を参考として設定しています。よって、認証評価との関わりから、教育に関する点検項目が多くなっています。今後は、国際交流に関する点検項目をはじめ、項目の見直しや項目の増加を検討していきたいと考えています。

A. (小倉理事)

教員評価については、毎年度教員個人評価を実施しており、「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」に関する自己評価を基に評価しています。人事給与マネジメント改革に反映させていくためには、この4分野の評価を基に総合的に評価する必要があります。教員個人評価の実施については、大学内でも共通認識を得られつつありますが、今後どう処遇に反映させていくかが課題です。

Q. (同窓会の要望)

データサイエンス学部が設置され、学長のリーダーシップの下、大学全体が大きく前進した印象を受けます。引き続き教育学部とデータサイエンス学部の連携をさらに深めていただきたい。そのため、教育学部にも、データサイエンスに関する教員・スペシャリストを配置していただきたい。

また、現場の教育にデータサイエンスを反映させていただきたい。教育委員会との連携や、滋賀県のなかでの大学と教育現場の理論の往還により、データサイエンスをさらに広めていただきたい。例えば、滋賀県の小学生に関する体力調査に関する具体的な分析をおこない、体力が改善するような提言ができれば、一般の方にもよりデータサイエンスの価値を実感することができる。このように、教育に関する研究分析をデータサイエンス学部教員が率先しておこなっていただきたい。

A. (位田学長)

経済学部との連携に関しては、経済学部でのデータサイエンス副専攻の整備や、両学部の講義の受講など制度的な整備ができています。一方、教育学部とデータサイエンス学部の連携については、課題が二つあります。第一は、キャンパスが分かれていることが課題です。今後、データサイエンスの教員を増員し人的な余裕ができれば、教育との連携も拡充していきたいと考えています。なお、現在、教育学部でもデータサイエンスの入門科目については開講されています。第二の課題は、教員免許の取得の関係で、時間割の制限があることです。なかなか難しい状況ではありますが、データサイエンスの教員が教育のデータを使いフィードバックしていく、教育委員会との連携による研究をするなど、今後研究の発展をすることができればと考えています。学部設置からまだ月日が浅いため、今後さらなる連携を目指します。

A. (竹村データサイエンス学部長)

教育学部との共同研究プロジェクトは動きはじめており、今後進展させていければと考えています。

A. (杉江教育学部長)

滋賀大学の教育学部は、総合大学の中の教員養成として、経済学部やデータサイエンス学部があることが強みであると考えており、今後データサイエンスとの連携も工夫し

て続けていきます。

Q. (後援会の意見)

自己点検・評価報告書について、年次計画やスケジュール、それに対する評価、また関心の高いトピックを取り上げるなど公開の在り方を検討いただきたい。

A. (位田学長)

今年度から自己点検・評価報告会の在り方を変更しており、昨年度までは自己点検・評価報告書に基づき報告していましたが、今年度からは戦略や実績を中心とした報告としました。そのため、自己点検・評価報告書との対応関係がわかりにくい点もあったと思われます。発表の方法について来年以降も引き続き工夫していきたいと考えています。

Q. (経営協議会委員の質問)

機構を中心としたガバナンス強化をされたとのことだが、機構は今年度設置されたのでしょうか。

また、機構のもとで内部質保証の点検をおこなっているのか。学部の内部質保証の実施体制がわかりにくいですが、どのようにおこなわれているのでしょうか。

A. (位田学長)

従来、情報機構、教育・学生支援機構、研究推進機構の3つがありましたが、大学の諸活動を整理し、活動別に機構という形にまとめ、機構長に理事を充てることで、大学を統一的に運営することを目指し、2019年4月にその他の2機構を設置しました。今までは組織中心の運営でしたが、大学の活動を中心に整理した形になります。

これらの機構をもとに、内部質保証の点検を実施しています。

A. (金子副学長)

学部の教育に係る内部質保証については、教育・学生支援機構の下で点検しています。各学部・研究科の点検に基づき、教育・学生支援機構で取りまとめています。